

垂水に響く『難波津の歌』

天皇の即位儀礼が吹田で…

新山ひろし

天皇制の根幹となる即位儀礼「八十島祭」が吹田で行われていた、と言えば、あなたは驚くだろうか。その根拠となるのは、垂水の二つの遺跡。一つは「垂水南遺跡」、昭和53年「難波津の歌」が墨書された土器が出土した。「難波津の歌」は天皇即位に関わる歌だった。二つ目は「五反島遺跡」、ここからは「八十島祭」に使われたと同形の「唐鏡」が掘り出された。この二つの遺跡は、共に、垂水の南にあり、どちらも即位儀礼「八十島祭」に関わりがある。こんな偶然あるだろうか。今回は、二つの遺跡から吹田における天皇祭祀の痕跡を探ってみることにしたい。

「難波津の歌」が書かれた墨書土器が出土した

まず「垂水南遺跡」を見てみよう。「わかりやすい吹田の歴史・本文編」には「平安時代初めの墨書土器44点が出土していますが、その中に「垂庄」や「中庄」などの東寺領垂水庄との関わりを示すとともに、『難

波津の歌』の墨書土器がありました」とある。しかも、大阪では唯一の出土であるという。墨書土器の実物を見たい。吹田市立博物館に電話すると「当館に展示していません」という返事。早速、博物館に向かった。博物館では、西本安秀さんが「垂水南遺跡は、弥生時代から鎌倉時代にかけての集落遺跡で、東南側に平安時代初期の河跡があって、その堆積土の中から墨書土器は見つかりました。土器は平安時代の初めころと思われる」と、解説してくれる。

「難波津に咲くやこの花 冬ごもり今は春べと咲くやこの花」これが『難波津の歌』だが、延喜5年(905)の『古今和歌集』仮名序に記されている。その墨書土器を見に行くと、「波津迹佐久 己毛利・」は、たしかに「はづにさくこもり」と読める。そして、「部止佐」は「春べとさく」の「べとさ」と読める。「最初は何か書いてあるか分からなかったのですが、研究の結果、難波の歌と読めてきま

した」と西本さんは言う。

「難波津の歌」には呪術的意味があった

歴史家の榮原永遠男氏の論文『難波津の歌と難波』には「難波津の歌は生命力を活性化させる呪力をもつ歌と信じられてきた。あるいは、それを書くことは、この歌の呪力を発動させる呪術的行為：冬から春になって花が咲いたという一般的なことだけでなく、その咲いた場所が他ならぬ『難波津』であることが重要：この花を生命あるいは権力そのほかさまざまなものの象徴と見なすことは可能であるから、さまざまものの再生を願う歌、さらには進んで再生を可能にする呪力を持った歌」と書かれている。『難波津の歌』の墨書土器は、習字のお手本や落書きではなく、榮原氏が言うように、「呪術」あるいは「祈り」と見る方が自然な感じがする。だとすれば、『八十島祭』のために『難波津の歌』が土器に墨書されたと考えられる。

『古今和歌集・仮名序』には天皇即位の祈りがあった

この『難波津の歌』の来歴について、『古今和歌集・仮名序』で紀貫之は、難波津の歌は帝の御初め也。おほさきの帝の難波津にて皇子ときこえる時、東宮を互いに譲り、位につき給はで三年になりければ王仁といふ人のいぶかり思ひて詠みて奉ける歌也。この花は梅なるべし」と書いている。

「おほさきの帝」とは、仁徳天皇のこと、彼が皇位を継ぐのを洪っていたので、百済の王仁博士が見かねて『難波津の歌』で即位を促した、ということである。つまり、『難波津の歌』には、天皇の王権を讃美するという祈りがあると考えていいだろう。そして、改めて、垂水南遺跡の墨書土器だが、平安時代の初め、という時代に、『難波津の歌』がどのような意味合いを持っていたかと言う事を考えてみたい。当時は、奈良の平城京から長岡京、平安京への遷都が行われた。この間、天皇家の血筋は、天武天皇系から桓武天皇の天智系へ移行した。そして、桓武天皇は百済系の高野新笠の息子である。『難波津の歌』に込められた日本の王権と百済系渡来人の故事を蘇らせることで、桓武天皇であるいは、それ以降の天皇即位を

権威づけようとしたのではないだろうか。つまり、「仁徳と百済の王仁」の関係は「桓武天皇と百済王族」の関係に照応させた、とみたいのだ。

五反島遺跡は八十島祭の場所?

もう一つのキーワード、『五反島遺跡』を見てみよう。この遺跡の発掘は昭和61年、「南吹田下水処理場」の拡張工事の際、平安時代の遺物の中に、唐鏡・小刀・馬具・鉄斧などが出てきた。それらは川岸の祭祀に用いられたものと見られ、中でも唐鏡は「延喜式」に書かれた「八十島祭」の記述「徑五寸」と一致した。墨書土器の推定年代も平安時代だった。「五反島遺跡と墨書土器との関係はどうですか?」と西本安秀さんに聞くと「五反島遺跡は八十島祭が行われたとする説があります。神崎川の南側の十八条遺跡は、大阪市の領域に入るために発掘できないのですが、昨年、五反島遺跡はより深い地層の発掘が行われ、様々なものが出てきます。研究はどんどん進んでいます」とおっしゃる。それは頼もしい。

八十島祭は天皇即位の儀礼である

「八十島祭」を『広辞苑』で引けば「大嘗祭の翌年、吉日を選び、使

を撰津国難波に遣わし、生島神・足島神を主とし、住吉神・大依羅神・海神・垂水神・住道神などを祭る儀式」とある。そして、この儀式は、琴にあわせて天皇の衣装を海に向けて振り、ついで禊(みそぎ)をして祭物を海に投じて、天皇の衣装を持ち帰る。つまり、『八十島祭』とは、大八洲の霊を天皇に付着させ、国土の統治者としての宗教的資格を付与する行事である。

『八十島祭』の儀式は海に向かって行われた。しかし、垂水河のセンターと見られている。議論の分かれるところだろうが、「垂水」の地は、かつて、東に河内湖、西に大阪湾を隔てる汽水域と見られ、時に海、時に河のような場所ではなかったか。そんな特別な浜辺が「大八洲」と見なされたとしたら…

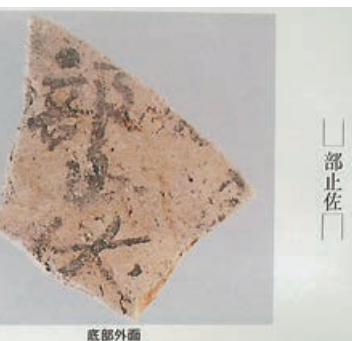
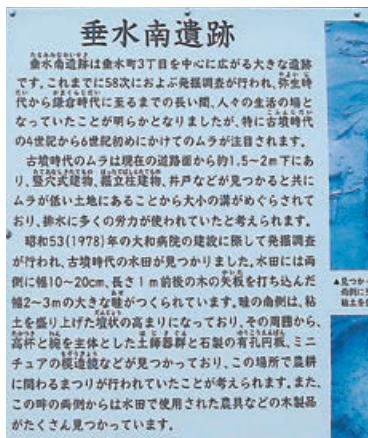
改めて、幻の「八十島祭」の現場、垂水南遺跡から五反島遺跡付近を歩いてみた。北は垂水の丘から、南は大阪の上町台地に一筋聖なるラインが連なっている。そして、大阪湾と旧河内湖をつなぐ東西のライン：この南北と東西の軸が、この垂水の町でクロスしている。ただならぬ場所である。今後、神崎川左岸の十八条遺跡の発掘が行われたら、きっと「八十島祭」の真実が明らかになっていくことだろう。(了)



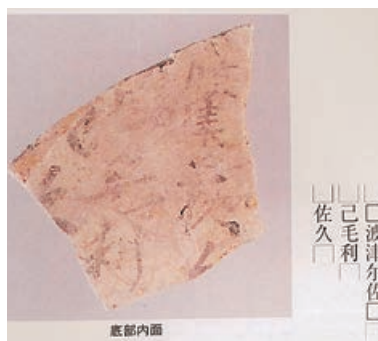
五反島遺跡から出土した木材類



垂水南遺跡と五反島遺跡の場所を示す地図。



墨書土器の外面：□部止佐□・・・「べとさ」と読める。『春べと咲く』の部分である。



墨書土器の底部内面：読みにくい「波津尔佐□・・・はづにさ」と読める。



吹田市立博物館の西本安秀さん。たくさんの資料を用意していただいた。

- 協力 ■ 吹田市立博物館 西本安秀氏
- 参考文献 ■ 『王仁博士の難波津の歌と猪飼野』 王仁博士歌碑建立委員会
- 『難波津の歌と難波』 榮原 永遠男著
- 『仮名発達史における難波津の歌』 森岡 隆著
- 『八十島祭：遺跡の発見』池田 半兵衛著
- 『博物館だより』NO6 NO15、NO56：吹田市立博物館発行
- 『吹田の歴史』第七号「垂水南遺跡出土の墨書土器」 藤原 学氏論文
- 『わかりやすい吹田の歴史』 本文編：吹田市立博物館
- 『即位礼と大嘗祭を読む』：戸村 政博